麥粒（ばくりゅう）

2020. Winter

麦粒／ NO. 134

発行・キリスト教センター

目　　次

もう一つのシュウカツ …… 石 田 聖 実（3）
無償労働はだれが担うのか？ …… 野 尻 洋 平（6）
F.C. クラインが顕した敬神愛人 …… 山 内 隆 文（13）
サルはさよならを言わない！ …… 木 村 光 伸（17）

NGU
Culture & Human Resources
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

もう一つのシュウカツ

石　田　聖　実

終わりの時には困難な時期が来ることを悟りなさい。そのとき、人々は自分自身を愛し、金銭を愛し、ほらを吹き、高慢になり、神をあざけり、両親に従わず、恩を知らず、神を畏れなくなります。また、情けを知らず、和解せず、中傷し、節度がなく、残忍になり、善を好まず、人を裏切り、軽率になり、思い上がり、神よりも快楽を愛し、信心を装いながら、その実、信心の力を否定するようになります。こういう人々を避けなさい。

だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です。こうして、神に仕える人は、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えられるのです。

（新約聖書　テモテへの手紙二　3章1～5, 14～17節）

もう 11 月下旬なのに紅葉がまだこれから。気候が変ですね。11 月 8 日が立冬でしたから、暦の上では冬に入って既に半月たっています。教会には教会暦というもう一つの暦があって、来週から待

降節（アドヴェント）、クリスマスを待ち望む期間に入ります。そして教会暦は待降節が一年の始まりになっています。そういうわけで、教会暦では、今週で一年が終わりになります。

10 月の授業欠席届の欠席理由に「内定式のため」というのがいくつかありました。内定おめでとうございます。就職活動のために本当に多くの時間と労力を割いてきたのだなぁと思います。大学生でシュウカツといえば、就職活動でしょう。しかし人生にはもう一つのシュウカツがあります。人生の終わりに向けての活動です。人生の終わり方には二つあります。もうすぐ終わる寿命を予測して準備できる場合と、全く予期しない死、突然の発作的病気であっという間に死んでしまう、事故や災害で即死してしまう場合などです。

妻の母が亡くなって 10 年ほど経ちます。晩年は体調が少しずつ悪くなっていく中で、家の中のものを整理していき、死後にはほとんど何も残っていませんでした。子どもたちに残されたことは葬式をすることと役所の諸手続きをすることだけでした。実に見事な終活でした。こんなふうに死ねたらいいなぁと思いましたが、何の準備もなく突然死がやってくる場合もあります。それはまたそれで、苦しんだり人に迷惑をかけたりする期間が少なくて済むとも言えます。

聖書はもう一つのケースを教えています。それは個人の死ではなく、世界全体の終わりです。

先ほど読んでいただいた聖書は、「終わりの時には困難な時期が来る」という言葉で始まっていました。この世界は神によって始められ、神によって終わりを迎えるというのが聖書の考え方です。先ほど人の死について、突然亡くなる人と死を予測して準備できるケースがあると言いましたが、世界の終わりはどうかというと、聖書によれば両方が当てはまります。

多くの人にとっては地震のように予期しないうちにやってく

ることになると聖書は言っています。けれども注意深い人たちにとっては台風のように予測し対策を立てることのできるものだと言っています。

終わりの時の特徴は何か？「そのとき、人々は自分自身を愛し、金銭を愛し、ほらを吹き、高慢になり…」、要するに隣人愛がない、自己中心の人ばっかりになるということです。世界ナンバー1 の国の大統領が自分の国さえ良ければ、他の国はどうなってもいいと考える時代です。自国ナンバー1 もよく見れば自分の選挙ナンバー1 でしかないように思われます。このような指導者が世界のあちこちに現れ、国民に影響が広がっていきます。しかも「信心を装いながら、その実、信心の力を否定する」、つまり宗教に熱心であるように見えるのですが、その実は信仰からは程遠いところにいる。そういう人たちが世界中に現れてくる。それを見たら、終わりの時がもうそこまで来ていると思いなさいというのです。

そして私たちは終わりの時に備えてどうしたらいいのか？手紙の著者パウロは「聖書から学びなさい」と教えています。聖書は、①キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます。②神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をします。③神に仕える人を、どのような善い業をも行うことができるように、十分に整えます。

聖書に基づく人生は、人の基準ではなく、自己満足でもなく、すべてを超えた神に認められる人生を確立します。この生き方で毎日を生きることこそが、終わりの時を見据えた生活「終活」と呼ぶことができると思います。

（いしだ　きよみ　本学非常勤講師・鈴鹿教会牧師　2019.11.26）

無償労働はだれが担うのか？
― 性役割分業を考える ―

野　尻　洋　平

今日は、三つの内容に分けてお話させていただきます。まず、今日のお話は、「共働き」をしている夫婦が仕事と家事、育児を両立する上で、どういった壁に突き当たっていくのか、あるいは、その壁を乗り越えるために必要なこととはどういうことなのかということを、ケーススタディを通して考えていきたいと思います。10～15分の時間なので、問題に対する答えをお示しするということよりも、むしろ、皆さんに問いかけるお話になっていくと思います。

今回は、「レインボーウィーク」ということで、ジェンダー、セクシュアリティについての理解を深めるということで設定されていますが、ジェンダーに関しては、今日来ていただいている皆さんは既にご存知だと思いますので、セクシュアリティについて、一つ振り返っておきたいのですが、セクシュアリティは、狭い意味では、性指向（セクシュアル・オリエンテーション）を指しているわけですが、広くとらえると、性に関わる現象全般を指している、「性現象の総体」と定義がされています。セクシュアリティの構成要素として、アメリカ心理学会が定義しているものなのですが、大きく4つに分けられると言われています。一つは、「身体（バイオロジカル・セックス）」、それから、「性指向（セクシュアル・オリエンテーション）」、三つ目が、「性自認（ジェンダー・アイデンティティ）」、四つ目が、「文化・性役割（ジェンダー・ロール）」。今日のお話は、「性役割（ジェンダー・ロール）」ということになります。

もう一つ、タイトルに入っている「無償労働」という言葉と「性役割分業」について簡単にお話ししておきたいのですが、そもそも「労働」というのは何かと言いますと、職業を通して生産に関わる、そのことによって所得・対価を得るということ

を労働ととらえることができます。一方で、家庭では何もしていないかというと、もちろん全くそういうわけではなくて、掃除、洗濯、料理とか、あるいは育児をしたりとか介護をしたりというような、様々な労働を行なっているわけです。こうした労働を「家事労働（ハウス・ワーク）」と呼んでいるわけですが、家事労働については賃金を得ているわけではありませんので、「アンペイド・ワーク（無償労働）」と言われるわけです。もう一つ、「性役割分業」に関してですが、男性に有償労働、そして女性に対して無償労働を割り当てるような仕組みのことを性役割分業と呼びます。いわゆる「夫は外で働き、妻は家庭を守る」といったような、「男性稼ぎ手モデル」という風に言われているようなものになります。日本社会では 1970 年代にこのモデルというものが完成して、今はだんだん解消されてきているというように言われていますが、M 字カーブの傾向が見られているものになります。性役割分業意識、つまり「夫は外で働き、妻は家庭を守る」という意見に対して、賛成だと回答する意見の数というのは、徐々に減りつつあるのですが、依然として、意識としても、あるいは実態としても、日本社会では非常に強く残っているということがあります。日本の場合は、男性は家事の 6 倍、仕事に時間を費やしているとも言われています。ですので、仮に共働きをしていたとしても、家庭に戻ると、女性は通常の有償労働に加えて、家事労働（無償労働）が降りかかってくるということになってくるわけです。しかしながら、最近では、共働き夫婦の間で男性が積極的に家事をやるといったようなことも、多くケースとして徐々に増加してきていると言われています。

では、共働きをしている夫婦が子育てをしていく中でどういった問題に直面してくるのか、ということについて事例を通して考えてみたいと思います。というわけで、とりあえず「A さん」と仮定しますが、38 歳・男性・大学教員ということで、事例を見ていきたいと思います。対象者の基本属性（社会学では基本属性という言い方をします）は、N 大学所属、社会学が専門の方ですね。

家族構成は、妻が営業職の仕事をし

ていてフルタイムで働いています。2018年から育児休業から復帰したのですが、復帰時に「残業無しフルタイム」という形で復帰をしました。営業職、つまりお客さんあっての仕事ですので、復帰して以降、残業せずに帰ってきたことはほぼない、一度もないというのが実際のところです。子供が二人いまして、三歳の息子と二歳の娘がいます。保育園に預けていまして、朝は7時45分から、夕方は18時頃までというような時間帯で、10時間くらい預けています。ちなみに、この息子さんはすごく父親に似ていますねと言われます。個人情報なので誰とは言いませんが…。

共働きをしていくうえで、育児サポート環境はどの程度あるのかというと、A さんは関東地方の出身なので、近くに親族はおりません。地域には知り合いはいるのですが、子どもを預かってもらうというところまでの関係性はまだ築けていないかなと思います。その他、病児保育を何箇所か登録をしていたり、ベビーシッターの登録をしたりしています。

こういったような家族構成、サポート環境の中で、これまでどういう風に、また、主に妻が復帰して以降、どんなことが起きてきたのかということについて振り返ってみますと、まず、2018年4月、育児休業から復帰して以降、何が起きたのかと言いますと、いきなり息子も娘もずっと風邪をひき続ける、あるいは何らかのウィルスにかかり続ける、更にそれが親にもうつるというような感じで、ずっと風邪なりウィルスなりを家族内で回し続けるという、そういった3か月間を過ごしました。

ようやくそれが落ち着いてきたかなと思ったのが秋口でしたが、今度は、妻が救急搬送されて、髄膜炎で入院をします。朝方、「すごく頭が痛い」、「二日酔いの百倍痛い」、「気を失いそうだ」ということで、救急車を呼んで運ばれていったのですね。はじめは、病院で診断を受けたときに、「片頭痛ではないか」と診断されて、ちょっとした痛み止めを処方されて帰ってきたのですね。ですが、帰ってきて午後になってもまだ収まっていない。午前中は保育園で行事があり、子どもを連れて外出していたので、妻の様子が分からなかったのですが、帰ってきて痛みも引いて

いないし、熱もあると。ただの片頭痛で38℃台の熱は出ないだろうと思い、やっぱりもう一度病院に行った方が良いのではないかということで、もう一度病院に行って、頭部のCTを撮ったのですね。CTを撮ったのですが、特に何もない。大丈夫ではないかという診断でした。しかし、Aさんは研究職なので、自分でいろいろなことを調べて、そしたら髄膜炎の可能性があるのではないかと思ったので、「髄膜炎の検査をしてもらえませんか」と言ったのですね。それで、実際に髄液を取って検査をしたら、髄膜炎でした。髄膜炎というのは二つ種類があるのですけれども、ウィルス性の髄膜炎と、細菌性の髄膜炎がありまして、細菌性の髄膜炎の場合は3割が死ぬのです。残りの7割の内の4割は何らかの後遺症が残るという非常に怖い病気です。結果的には、ウィルス性の髄膜炎でした。ですので、一週間ほどで退院したのですが、年明けぐらいまで体調が戻らなかったかなと思います。結果的には、育休復帰後の数ヶ月間で、妻は10kg体重が減少しました。

年が明けて2019年に入ってからは、昨年春先に引き続き、2月から3月にかけて、再びずっと風邪を家族内で回し続けるということがおきました。この時期は、ほぼ毎日、毎週のように病児保育にずっと預け続けるという形でした。

それから、つい最近なのですが、先月、妻がまた救急搬送されます。これも、深夜に「気を失いそうなほどお腹が痛い」と言い出しました。結果的には、この時は午前中の内に病院から帰ってきたのですが、おそらく食中毒だということでした。日ごろの疲れがたまっていて、免疫機能が低下している時は食中毒にかかりやすいということで、そういうことがありました。救急車を呼ぶと非常につらいのは、救急車が来ると、「もう一人同乗してください」、「旦那さんも一緒に来てください」というように言われるんですけれども、小さい子がいると一緒に行けないんですね。一緒に行けないと、やはりその後どうなっているのかということがずっと分からないままなので、非常につらい思いをします。深夜なので、もちろん誰かに預けるということもできないですし、家にいるし

かない、そのようなことがありました。この一年間で、夫の方は、体重が 5kg 増えました。育児や生活のストレス等々で、体重が増えてしまいました。

この一年半を振り返ってみると、やはりワンオペ（ワンオペレーション）の家事・育児ということがすごく慢性化しているなと言えると思います。平日は夫の方が 8〜9 割、家事・育児を担うという一方で、土日は、夫の方が研究会や学会で出張に行くといったことがありますので、そうなると土日は、妻の方がワンオペになるというようなことがすごく続いていたなと思います。

実際に、共働きというものが今の日本社会でどれぐらい一般的なのかということを簡単に振り返ってみますと、90 年代を通して、共働き世帯と専業主婦世帯というのは逆転をしています。今、共働き世帯の方が優勢、多くなっているということですね。ですので、70 年代半ばぐらいに安定的に確立したいわゆる男性稼ぎ手モデルというものが、80 年代、90 年代にかけて解体をしていって、現在に至るということになっております。

もう一つ、「女性にとっての理想のライフコースはどのタイプですか？」という、社会調査の質問項目なのですけれども、5 つの選択肢があって、①結婚せずに仕事を続ける、②結婚をするが子供を持たずに仕事を続ける、③結婚をし子どもも持つが仕事も続ける、④結婚をし子どもも持つが結婚あるいは出産を機会に一旦退職し子育て後に再び仕事を持つ、⑤結婚をし子どもも持ち結婚あるいは出産を機会に退職しその後仕事は持たない、という 5 つの選択肢が用意されていて、一言で言うとそれぞれ、「未婚」、「ディンクス（DINKS）」、「両立」、「再就職」、「専業主婦」に分かれるのですが、実際にどういう結果が出ているかと言いますと、女性の回答の傾向をみると、1980 年代から 2010 年代を見てみると、「両立」が徐々に増加していることが分かります。一方、90 年代以降に限ると、どのカテゴリーもそれほど大きな変化は生じていないということが分かります。

もう一つ、男性に対して、「女性にどういうライフコースを歩んでもら

いたいと思いますか？」という、女性に期待するライフコースを聞くと、先ほどとは少し違う傾向が見えてきます。男性の場合は、80 年代から2010 年代にかけて「両立」があきらかに増えてきているということと、あと「専業主婦」になってほしいと回答している比率が大きく減ってきているということが分かります。つまり、女性の方は90 年代以降、経年変化があまりない一方で、男性では「両立」が増加し、かつ「専業主婦」が非常に減少してきているということが分かります。つまり、男性においては自分の収入で専業主婦の妻あるいは更に子どもを養うということが難しくなってきているという意識がおそらく広まりつつあるということが分かります。

最後に、以上の事例をふまえて、大学時代の 4 年間でみなさんに考えてもらいたいなということがいくつかあって、一つは、今日のテーマでもありますが、共働き育児に必要なこととか必要なものとはいったい何なのかということです。私の妻が…、いや、A さんの妻が（笑）、新卒の就職活動イベントで先輩社員として呼ばれたときに、大学 4 年生の就活生に、「共働きでどういうことが大事ですか？」と聞かれた時に、「ロキソニンです！」と胸の中で叫んだそうです。要するに、痛み止めですよね。育児にはもちろん休んでいる暇はありませんし、どんなに辛くても、頭痛がしようが、発熱しようが、とにかく仕事にも行かなければならない。ロキソニンは手放せないと言っていました。実際に、実は今、今週月曜から、また同じように「風邪ウィーク」が始まっていまして、息子がはじめに発熱をして、昨日ぐらいから娘も発熱をして、今日は二人とも病児保育というような形で、そして、当然のことのように、私にもうつりまして、私も今朝はロキソニンを飲んで 1 限の授業をしてきました。

もう一つ、そもそも自分の家族観とか仕事観とか人生観というものを、やはり今のうちによく考えておいた方が良いと思います。もちろん、家族を持つ／持たない、子供を持つ／持たない、いろいろな選択肢がありますので、そういったこととか、仕事をするとしても、転勤型なのか、転勤が無い仕事に就くのか、あるい

は、人生の中でどういったことを最優先事項にするのかということを今のうちに考えておく必要があるかなと。

更に、授業…、社会学に限らずいろんな授業がありますので、共働き、あるいは育児をめぐる社会が今どうなっているのか、雇用環境とか、育児環境とか、あるいは、性役割分業に代表されるようなジェンダー意識、あるいは、外国ではどうなのか、フランスではどうなのか、スウェーデンではどうなのか、そういったこともぜひ自分たちで調べて、授業の中で知識を身につけてもらいたいなと思います。

こういったことを考えていくというのは、もちろん結婚するつもりがある人もそうですし、結婚するつもりがない人、子どもを持つつもりがない人も含めて、そういう人たちにとってもすごく重要なことです。たとえば、会社で隣に座っている同僚が、どういう家庭形態の家族を持っているのか、共働きをしているのか、シングルマザー（ファザー）なのかとか、いろいろな形態の家族を持っている人たちがいるわけですね。あるいは、社会を見ても、様々な家族を持っている人がいるわけです。つまり、ライフコースの多様性とか、あるいは家族の多様性というものを考えて、きちんとそれを尊重して、確保していくということが社会の豊かさに繋がっていくと考えます。もう一つは、そういった社会の変化というものをとらえつつ、かつての（私も含めて）親世代と同じような家族のあり方、あるいは仕事の働き方というのはとれなくなってきている時代に変わりつつありますので、そういった社会の変化というものを理解しつつ、自分の人生を作っていくという必要があるのではないかなと思います。

（のじり　ようへい　現代社会学部准教授　2019.7.4）

F. C. クラインが顕した敬神愛人

—1894 年 7 月 12 日クリーブランドでの「ある事件」を巡って—

山 内 隆 文

はじめに

名古屋学院大学の前身、名古屋英和学校は、1887 年、F.C.クライン（Frederick Charles Klein, 1857-1926）によって創設されました。クラインは名古屋英和学校の校訓を敬神愛人とし、それは現在、名古屋学院大学の建学の精神として受け継がれています。今日は、米国に帰ったクライン自らが顕した敬神愛人について、新聞記事を元にお話しします。時は 1894 年 7 月 12 日、オハイオ州での出来事です。その頃、日本は明治 27 年、日清戦争の開戦前夜でした。クラインはキリスト教の大会において、ある黒人牧師と一緒に歌を唄いました。これが「事件」として報じられました。

1.キリスト教共励会世界大会

1883 年 9 月、横浜に上陸した F.C. クラインは、途中 1 年半の帰国をはさんで 10 年間、日本で活動すると、1893 年 4 月帰米しました。翌 1894 年 7 月、クラインはオハイオ州クリーブランドで開かれた第 13 回 Christian Endeavor 世界大会に参加しました。

Christian Endeavor というのは、1881 年、F.E.Clark（1851-1927）が妻 Harriet と始めた青年信徒のキリスト教共励会です。48 人から始まった同会は、1894 年 1 月には 1,724,460 人の会員を擁する組織に拡大していました[1]。第 13 回大会は、ホールから溢れた参加者のため大きなテントが立てられたほどの盛況ぶりでした。

2.大会での出来事

その大会の最中、7 月 12 日木曜日のことです。会場である

[1] The enterprise. (Wellington, Ohio), 18 July 1894. https://chroniclingamerica.loc.gov/lccn/sn84028272/1894-07-18/ed-1/seq-5/（最終閲覧日 2020 年 1 月 10 日）

Saengerfest ホールで、メリーランド州ボルチモアの黒人教会から参加した大男の牧師が「Baltimore '96」という歌を披露していました。この歌は、2 年後にボルチモアで開催される 1896 年大会に参加者を招くための曲でしたから、彼は重要な役割を担っていたのです。

ところが、突然、その歌声が止まってしまうアクシデントに見舞われました。男性はトランペットのような大声で唄いはじめたので、途中で息が切れてしまったのかもしれません。戸惑っていたであろう男性を見たクラインは、すぐさまその隣に進み出ました。そして、黒人牧師とともに、最後までその歌を唄ったのです。会場では、不穏な空気に包まれているなかでの、とっさの判断と受けとられたのでしょう。観客は、驚きとともに万雷の拍手で応えました。巨体の黒人牧師が体を小さくして安堵している様子が目に浮かぶようです。

このときクラインがとった行動は、*The Methodist Recorder* 紙によって、「重要な事件（A Significant Incident）」として伝えられました（図 1）。

3.南北戦争後の黒人差別

聴衆を前に、黒人と白人の牧師がならんで歌を唄う。このことは、現代なら新聞記事にもならないほど日常的な出来事です。しかし、当時の米国社会では、大衆が注目する「事件」であったのです。背景となる米国の歴史をみながら、クラインがとった行動を考えてみましょう。

1861 年、米国で南北戦争が勃発しました。南北戦争は、奴隷制の存続をめぐる北部と南部との内戦で、1865 年北部が勝利しました。米国の奴隷制度は南北戦争とともに終わりましたが、黒人への差別は残ったままでした。南部各州では学校、列車、レストラン、ホテルなどを白人用と黒人用に分けるよう義務づけていました。いわゆるジム・クロウ法と呼ばれるものです。マーティン・ルーサ・キング牧師の公民権運動により、1964 年の公民権法が制定されるまで、ジム・クロウ法は南部の各州で存

A Significant Incident.

AN incident occurred in Saengerfest Hall, at the Christian Endeavor convention in Cleveland, on Thursday forenoon of last week, that aroused much interest. In a lull in the exercises there was a call for State songs. The delegates from one of the States had sung their State song, and there was a call for Maryland. A large colored man, pastor of a colored church in Baltimore, with a voice like a trumpet, stepped forward and began to sing the song composed by Paul M. Strayer, entitled "Baltimore, '96," it being an invitation to hold the Convention of '96 in the Monumental City. Something occurred to interrupt him for a moment or two, when Rev. F. C. Klein, a Marylander, but at present pastor of Trinity Church in Allegheny, stepped to the side of the colored songster, and joined in with him to complete the song. The idea of a colored man and a white man standing side by side, representing the old slave State of Maryland, was too much for the audience, and they burst out at every pause in the song with tumultuous applause. It was an incident that represented the leveling and the harmonizing spirit of Christian Endeavor. — *The Methodist Recorder.*

図 1. F.C.クラインが黒人牧師と一緒に唄ったことを伝える記事[2]

（試訳）

重要な事件

先週の木曜日（1894 年 7 月 12 日）午前、キリスト教共励会世界大会の会場となったクリーブランドの Saengerfest ホールである事件が発生し、多く人々の関心を集めました。会議の休憩時、州歌が求められました。ある代表がその州の州歌を歌い、次いでメリーランド州が求められました。ボルチモアの黒人教会の牧師である大男が前に出て、トランペットのような声で、P.M.Strayer 作曲の「ボルチモア 96」を唄い始めました。その歌は、1896 年大会に招待する作品でした。何かが起こり、歌が一、二度、途中で止まってしまいました。すると、メリーランド出身の F.C.クライン牧師（現在は Allegheny のトリニティ教会牧師）が、黒人の歌い手の横に進み出て、最後まで一緒に唄ったのです。奴隷州であったメリーランド州を代表して黒人と白人がならんで立っている様子に観客は瞠目し、歌の合間に万雷の拍手が起こりました。それは、キリスト教共励会の平等と調和の精神を表す出来事でした。
— *The Methodist Recorder*

---

[2] Official report of the thirteenth International Christian Endeavor Convention. United Society of Christian Endeavor, 1894.
https://books.google.co.jp/books?id=GaBVAAAAYAAJ&dq=editions%3AsRQXoxy_-dIC&hl=ja&pg=PA1#v=onepage&q&f=false （最終閲覧日 2020 年 1 月 10 日）

在していました。

1894年、オハイオ州で開かれたキリスト教共励会でのクラインのエピソードは、その70年も前、まだ黒人に対する偏見や差別が残っていた時代のものです。クラインやその黒人牧師が属していたメリーランド州は、南北戦争時、中立の立場をとっていましたが、元々は奴隷制を認める奴隷州でした。大会の開催地であるオハイオ州は、南北戦争以前から奴隷制を禁止している自由州でした。つまり、自由州であるオハイオ州で、奴隷州であったメリーランド州を代表して、黒人と白人とが同じ場所に立って同じ歌を唄ったのです。その様子は、1894年当時、観衆には想像もできないことでした。

このような背景を知ると、あのときの黒人牧師が、白人の観衆を前に緊張した面持ちで立っている様子が想像できます。そして125年後にこの記事を知った私たちには、クラインが信念をもって黒人牧師の横に歩み出ていく、その情景がはっきりと見えるのです。

4.敬神愛人とともに

この「事件」の1年3か月前まで、クラインは名古屋で日本の生徒たちとともに賛美歌を歌っていました。クラインは、礼拝において、マタイによる福音書22章37～39節を引用しながら日本人に語りかけたことでしょう。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい』、そして、『隣人を自分のように愛しなさい』」と。米国にもどってからも、クラインの姿勢は変わることはありませんでした。クラインがクリーブランドで黒人牧師と一緒に唄ったとき、その脳裏に去来したのは歳月をともに歩んだ名古屋英和学校の生徒の姿であったように、私には思えます。

（やまうち　たかふみ　瀬戸キャンパス総合事務部参事　2019.10.18）

サルはさよならを言わない！

木　村　光　伸

イエスは言われた。「『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

（新約聖書　マタイによる福音書 22 章 37～40 節）

ただいま宗教部長と共に拝読いたしました聖書の箇所は、私どもの大学の“建学の精神”の最も拠り所としているところであります。また、私自身が 30 数年間、この大学で勤務しながら、何度も何度も繰り返し読ませていただき、また考えさせていただいた聖書の箇所でもあります。

「敬神愛人」という、私どもの“建学の精神”は二つの部分から成り立っています。一つは、もちろん「神を敬い、愛しましょう」ということでありますけれども、もう一つは、「隣人を自分のように愛しなさい」です。これを私たちは、「敬神愛人」の「愛人」という言葉で、きわめて一般化しています。

聖書の中に書かれている「隣人」とは、何でしょう。隣り人、隣にいる人、近くにいる人、友達…。そういう人を隣人と呼ぶのでしょうか。実は、その答えは、同じマタイによる福音書の中にもありまして、たとえば、5 章 44 節にこう書いてあります。「敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」。敵もまた隣人である。このように定義いたしますと（まぁ、聖書の御言葉を私ごときが定義するのは失礼な話ですけれども）、私た

ちの周りにいる全ての人々を「私の友」と同じように愛しなさい、と描かれているわけです。大変すばらしい書き方だなぁと思います。

実は、私は南米で自然と人間の調査をかれこれ45年ぐらいやってきました。中南米の世界にヨーロッパ人たちが侵略して入ってきた頃、つまりコロンブスがアメリカ大陸を発見しましたのは1492年、15世紀の終わりですけれども、それ以降のヨーロッパ人と現地にいた先住民たちとの間の関係においては、どう見てもこんな風に、隣人たるインディオが同じように愛されたとは思えない、そういう世界を私はずっと見てきました。だからこそ、この部分にいつも引っかかって、「何でだろうなぁ」と思うのですね。中南米にスペイン人やポルトガル人が行って、この最前線に実は、カトリックの聖職者たちが布教のために出ていくのですが、その時に、彼らは出会った人たちを隣人と思わなかったのだろうか。

16世紀に入りまして、ローマ教皇が「インディオもまた人間だよ」という“人間宣言”をいたします。そして初めて、インディオの人たちも人間として扱われるようになるのです。とは言っても、いまだにその差別の構造というのは残ったままです。

何もそんな話を持ち出さなくても、私たちの周りにはいたるところに「人間だけれども人間扱いされていない」、「隣人ととても呼んでもらえない」人たちがたくさんいる。日本の中でも、そういう目に合っている人たちが少なからずいる。そういう状況の中で、これは現代的な問題としてもう一回考え直さなきゃいけない部分ではないかと思います。

今から2000年も前に、イエスの言葉として、「隣人を自分のように愛しなさい」と教えられ、みんな分かったつもりだったにもかかわらず、この現代社会においてそれがまだまだ実現していない、こういう問題について私たちは、キリスト教学校で「敬神愛人」をモットーとする大学で学んでいる者として、常に心に刻み、また反省しなきゃいけないのではないかな

と思っています。

今日のお話はそれと関係があるような無いような話なのですけれども、私自身は50年近く、「おサルさん」の研究をしてまいりました。何のためにそんなものを研究するのか、とよく聞かれます。何かの役に立つのか、サルの研究なんかして何の役に立つんだ、と。多分、何の役にも立たないかもしれない。少なくとも、お金儲けにはならないし、立身出世ともあまり関係が無さそうだし、それでも私は、そういう世界の中でおサルさんの研究をずっとやってきました。それは、そのことを通して、サルの生き様、あるいはサルの社会の中の様々な出来事を観察して記録して、そしてそれを何とか自分で理解しようとするということを通して、人間もまた生物の一員としていかにあるべきなのか、ということを考えるキッカケにしたかったからです。

キッカケにしたかったと言っても、なかなかそこから先に行けなくて、いまだに私が漠然と思っていたようにはサルと人間とは繋がらない。サルはサル、人間は人間。そういう状態が続いて足踏みをしていますけれども、少しずつ自分なりに頭を整理してきた問題があります。その一つが、今日のテーマ、「サルはさよならを言わない！」ということです。

私たち人間は、仲良くなりますと、いろんな形で挨拶をいたします。皆さんも挨拶をされますよね。時々、挨拶しても知らん顔して通り過ぎる人もいますけれども、まぁそんなのはご愛嬌で、普通はみんな出会うと挨拶をします。でも、一つの世界の中でしかそれは実現できていません。たとえば、仲間内では挨拶をしますが、地下鉄で乗り合わせて、「こんにちは」、「おはよう」、「良い天気ですね」なんてことはまず言わない。疲れて帰る途中で、道端で出会った人にいきなり、「今日も大変でしたね。疲れましたね。また明日もよろしくね」なんてことも言いません。つまり、私たちが挨拶をするのは、知っている世界の中の約束事であるわけです。“決め事”と言っても良いかもしれませんけれども、そ

うすることによって、社会が潤滑剤を得てうまく回っていく。そうであったら、それはどんどんやったら良いことなのだろうと思いますし、実はおサルさんも、そういう意味での挨拶はいっぱいやります。

僕はこれまで、ニホンザル、ホエザル、クモザル、ウーリーモンキーとか何とかかんとか、何種類ものサルを何十年間も見続けてきましたけれども、みんな朝、夜が明けるとともに騒がしくなっていきます。「何をしているんだろう」と、良く見ていますと、それはまさしく“挨拶”。ちょっと離れたところで寝ていた連中が、少しずつ明るくなっていく中で、ホーッ、ホーッ、と鳴き交わしをいたします。サルによって声は違いますけれども、お互いに鳴き交わしながら少しずつ近づいていって、そして、Face to Face だったり、あるいは、身体と身体をくっつけたり、時には抱き合ったりしながら挨拶をして、そしてまた何事もないようにその日が始まっていきます。

なかなか麗しいものだなぁと思いながら、僕はずっとサルを見てきたのですけれども、ある時、1999 年のことですが、コロンビアのアマゾンの真ん中にある調査地で、僕は「クモザル」というサルを見ていました。クモザルっていうのは、手足が長くて、しっぽで器用にぶら下がったりできるおサルさんです。このおサルさんを、僕は 1976 年ぐらいからずっと研究しているのですけれども、一つ困ったことがありまして、クモザルの群れっていうのは、だいたい 2〜30 匹からなる割と大きな集団なのですが、その集団がまるごとずっと 30 匹のまま行動してくれることはまず無くて、毎日毎日、今日は 3 匹だけ見たとか、今日はお母さんと子どもの集団が 2 組あったとか、実にてんでばらばらに森の中で過ごしている。そういう意味では、大変困ったおサルさんで、なかなか記録が取りにくいのです。でも、長く見ていると、このてんでばらばらに見えているけれども、最終的には 30 匹ぐらいの中でしかお互いの付き合いが無いということが明確

になって来て、それが一つの群れだと判定するわけです。そういう群れをずっと観察しているのです。クモザルの声っていうのは大声ですから、だいたい 1km ぐらい先まで聞こえるのですね。ということは、それぐらい離れてバラバラにおるやつもいるわけです。

朝、6 時ちょっと前ぐらいから鳴き交わしが始まる。その頃はまだ真っ暗です。ですから僕は、朝 5 時ぐらいに起きて、だいたいいつものところに行って聞き耳を立てているのですけれども、そうすると、そこで鳴き交わしが始まる。あっちでもこっちでも鳴いている。一番大きな声で鳴いている…、どうもあそこ辺りにみんな集まっていくのだろうなぁとこっちは思って、真っ暗闇の中走っていくわけなのですけれども、そうすると、鳴き交わしながら、だんだん一つのコンパクトな集団ができあがっていきます。それを良く見ますと、みんなお互いに抱き合ったり、肩をたたき合ったりしている。なんか人間臭いですね。そのようにしながら、葉っぱを食べたり、実を食べたり、あるいは休息をしたり、お昼寝をしたりして、一日を過ごしていくのです。気がつくと午後の 2 時 3 時になっていきます。

そんな中、「何か変だな」と思って、周りを見渡してみますと、あんなにコンパクトに集まっていたのに、もう目の前に数匹しかいない。ちょっと離れた所で、声やガサガサという音は聞こえますけれども、どうもずいぶんまとまりが無くなってきたなと思いつつ、それでも、ずっと記録をつけながら、何匹かのサルを追いかけていくんですね。そうすると、そのうち、目の前のサルたちは確かにずっと見ていますからそこにいるのですけれども、周りに誰もいなくなる。誰もいなくなるけれども、あんなに朝、一所懸命、大声出して探していたのに、誰も、「おーい、みんなどこに行ったの？」とは聞かないのですね。そして、夕闇が迫って一日が終わってしまう。

はて、これはいったい、何だろう。霊長類学というサルの学問の

世界では、こういうのを“離合集散”と言います。離合集散というのは、出会って別れて、集まって離れて、ですよね。出会って集まって、そして、別れて離れていく。でも、どうやら、出会いと別れは、同じではないようだ。出会う時には一所懸命、探して探して、仲間はどこだ？って探し回って、また今日も会えたね、良かったね、と喜んでいたはずなのに、別れる時にはスッといなくなってしまう。これがどうやら霊長類の一般的な出会いと別れのあり方らしい。ずいぶん別れはそっけないですよね。冷たいですよね。

1960年代に、アフリカの「カラハリ砂漠」という非常に辺鄙なところで生活をしている「ブッシュマン」という裸で暮らしていた人たちの世界を研究した田中二郎先生という方がいます。ブッシュマンは、1970年代になりますと、カラハリの原野・砂漠地域から追われて集団生活を余儀なくされるので、本来の生活の大半はそれで途絶えてしまうのです。でも、そのブッシュマンの本来の生活を研究した田中先生の報告によれば、ブッシュマンもまた、せいぜい最大50人ぐらいの数家族と独り者の世界がくっついたような小さな集団で暮らしていたけれども、ある時、ふと、その集団のメンバーの一人であったり、一家族であったりがいなくなる。その時に、「さよなら」って誰も言わない。気が付いたらいなくなっているというのですね。

人間社会としては変なもんだな、とその当時は思っておりましたけれども、いや実は、人間社会も含めて、私たちの別れっていうのはそういうものなのかもしれない。私はそれを、別れはそっけないもんだとか、そういう風に捉えるのは止めにしました。別れというのは、私たちは一所懸命頑張って出会って、関係を作って、みんなで仲間として、持続的に生活をしているわけですけれども、でも、ふと一人になる…。でも、一人になるけれど、必ず明日の朝になればまた出会える、次の日の出会いっていうものが期待され、予想されている。そんな希望があるのだ

から、別れる時にいちいち「さよなら」は言わない、とその時は結論づけました。今でも、そうだろうなぁと思っています。だから、黙って消えるのは決して、人でなしでも冷たい世界でも何でもない。それは、私たちが“繋がり”というものを理解し、繋がりというものを信じて、そして明日また会えるということを（しっかりと頭の中で理解しているかどうかは分かんないけれど）、気持ちでは理解しているということなのだろうなぁと思うのです。人間の社会的なあり方を考えるにあたって、このような理解の仕方はそれなりに大切な視点ではないのかと思っている訳です。隣人を愛するということの背景には、そのように人は人を信頼し合っているということが、前提的に横たわっているのではないでしょうか。

実は、私自身は、もう2020年の3月で定年退職をいたします。この愛する名古屋学院大学で長い間、毎年毎年、何回も何回も、チャペルアワーでお話をさせてもらいましたけれども、それも今日で最後です。今日が最後ですけれども、僕には隣人を愛すると言う“希望”がありますから、「さよなら」は言わないでおきたいと思います。どうもありがとうございました。

（きむら　こうしん　国際文化学部教授　2019.12.17）

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでダウンロードできます。

No.1.「経済の論理と人間の論理」（塩沢　美代子）
No.2.「心を問い続けて」（谷　昌恒）
No.3.「国際化時代におけるキリスト教の使命」（徐　洸善）
No.4.「激動化する現代史と神のみことば」（池　明観）
No.5.「生きることの感動」（金　纓）
No.6.「生きるよろこび」（村田　佳寿子）
No.7.「心を支えているもの」（山本　将信）
No.8.「主の愛この眼にありて」（武岡　洋治）
No.9.「日本におけるキリスト教主義大学の使命」（池　明観）
No.10.「いのちを支えるホスピスケア」（柏木　哲夫）
No.11.「天と地のひびき」（小塩　節）
No.12.「絵本のちから」（松居　直）
No.13.「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？
－こどもの物語と聖書に見られる＜しょうがい者＞差別－」
（荒井　英子）
No.14.「お父さん、僕はなに人？　－間（はざま）から読む聖書－」
（金　永秀）
No.15.「人権・生命の尊厳　－野宿生活者の現場から－」（松本　普）
No.16.「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」（太田　信吉）
No.17.「メイク・ア・ウィッシュ　～夢の応援団」（原　順子）
No.18.「人間関係を生きる知恵」（島　しづ子）
No.19.「命のことば」（水谷　誠）
No.20.「宗教が戦争の原因？　一神教がアブナイ？」（桃井　和馬）
No.21.「福田敬太郎――神に向き合った生涯」（小野　静雄）
No.22.「F.C.クラインと「敬神愛人」」（黒柳　志仁）
No.23.「祈りつつ学び、感謝しつつ働く
－内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころ－」（葛井　義憲）

麦粒／季刊／第134号 2020. 3. 18　発行　名古屋学院大学キリスト教センター
〒456-8612　名古屋市熱田区熱田西町1番25号　☎〈052〉678-4096